

[事前評価]

課題名 茨城県における繁殖和牛の周年放牧管理技術の確立（令和2～6年度）

【課題の概要】

近年、繁殖経営は戸数・飼養頭数ともに減少傾向にあり、特に4頭以下の小規模飼養層の減少が著しい。小規模層が減少する大きな要因のひとつに労働収益性が低いことがあげられる。このため、小規模層の経営を省力化により労働生産性を向上させ、経営規模の拡大に結びつける必要がある。

本県では、平成30年11月に「新たな総合計画」を策定し、畜産経営の規模拡大等による収益性の向上や和牛の生産拡大、及び水田等での放牧を活用した省力管理技術の確立を推進している。

しかし、放牧を実施するにあたり、季節性による草量の確保の問題や、放牧地での人工授精時の捕獲や畜舎への移動等の管理に手間がかかることから、省力的に管理できる技術開発が求められている。

そこで、これまでの研究で開発した冬季及び夏季の放牧対策を総合的に組みあわせた、生産者が簡易に取り組みやすい周年放牧管理技術の開発のため、以下に取り組む。

- ① 夏用牧草(飼料用ヒエ)及び寒冷地用牧草(フェストロリウム)の湿田等における放牧の利用性の検討
- ② 既往成果技術の組合せ実証
- ③ 放牧地における、放牧付帯施設(捕獲・授精施設、給水施設等)の実証
- ④ 「省力的な放牧管理技術マニュアル」の作成

【評価結果】(評価委員数 4名)

○各項目の評価(各評価委員の平均点)

研究の必要性・重要性	期待される成果・貢献	既往研究等との関連性	創造性・独創性	研究目標の妥当性	研究方法の妥当性	合計点
4.5	4.5	4.5	3.8	4.0	3.8	25.1

○総合評価 A:採択

(A:採択 B:計画を見直し採択 C:不採択)

【委員の意見助言と対応策】

評価項目	意見・助言	対応策
研究の必要性・重要性	・省力管理への要望は高いと判断する。しかし、ターゲットが絞り込まれていないため、放牧のニーズがどこにあるのかをしっかりと見極めてから開始すべきである。	・周年放牧により、管理の省力化とともに畜舎等の施設が不要となり、施設コストが抑えられ、規模拡大や新規就農が容易となる。
期待される成果・貢献	・遊休耕地の利用推進に繋がる取り組みであるが、現場で取り入れられるよう課題の重点化が必要ではないか。	・遊休農地、特に水田では放牧に取り組ぶら。そこで水田に重点をおき放牧が可能となる手法及び技術を実証する。
既往研究等との関連性	・他県での事例も参考にしつつ、本県でのニーズにマッチする取り組みを期待する。	・他県での研究成果を踏まえ、本県に適応した本県独自の放牧手法及び技術を実証する。
創造性・独創性	・国や他県での取り組みの応用であり、これまでの成果をさらに発展させる目的で実施するものとして重要である。	・放牧に関する個々の技術は、ほぼ確立されているが、本県に適応した新たな草種や技術の組合せを実証する。
研究目標の妥当性	・既存の成果に基づき技術改良を図るもので、事業の継続性の面でも目標設定は適切である。しかし、周年放牧により解決すべき繁殖経営上の問題点と放牧による解決の鍵がどこにあるのか、分かり難い。	・繁殖経営では飼養頭数の減少が課題となっており、労働生産性の向上が求められている。そこで、放牧による管理の省力化により規模拡大を可能とするとともに、経営の安定を図る。
研究方法の妥当性	・周年放牧については本県も含めて既に多くの成果が出されており、それらとの違い、現在本県で特に取り組む必要があるのはどこなのかが見え難い。	・放牧利用を推進するため、遊休農地の水田の割合が高い繁殖地帯である県北地域において、新草種の適応性及び水田での湿害対策技術を実証する。
総合評価	・本県での繁殖経営のニーズにマッチする、現在の平均的な経営規模からの拡大に向けた課題設計と成果の創出を期待する。また、現場における実証とICTによる省力管理についても検討して欲しい。	・本県における、飼養規模、立地条件等に適応した放牧技術確立のため、農業改良普及センターと協力して現地に実証圃を設置して実証する。